

保育における振り返りのプロセスについての一考察

—子ども理解・対話・可視化に着目して—

田島 大輔

A Study on the Process of the Reflection at Childcare

-Focusing on, Visualize dialogue and Child understanding -

Tajima Daisuke

キーワード：対話・子ども理解・カリキュラム・マネジメント・専門性

Key Words : dialogue、Understanding children、Curriculum management、Childcare specialist

要約：改定（改訂）された幼稚園教育要領・保育所保育指針・認定こども園教育保育要領において、保育者一人ひとりが自分自身の保育を振り返り・省察し、保育を自分自身でカリキュラム・マネジメントしていくことについて言及された。本研究では、保育の振り返りのプロセスに着目し振り返りのプロセスの中で対話や子ども理解の深まり、可視化していくことについて、振り返りの実態調査とインタビューによる調査・検討を行った。振り返りのプロセスは、自分自身の見方を正しく評価し、こうであるべではなくどの様なことも受け入れられる心構えが重要である。子どものことを見ようとして見るのではなく、見えてくることを見逃さないこと。「よく見る」より「よく見える」事を意識していくことで必要がある。その上で物理的な時間を確保しながら、振り返りや対話の方法を、自分達なりに考えていく事が重要である。そして振り返る事ですぐに何かが見えるようになるのではなく、何でも受け入れられるようにしておくことでみえてくるのである。

Abstract (English) : Regarding the revised (revised) kindergarten education guidelines, nursery school childcare guidelines, and approved childcare school childcare guidelines, each childcare provider reviews and reflects on their own childcare and manages their own curriculum. Was mentioned. In this study, we focused on the review process of childcare, and conducted a survey and interview through a survey of actual conditions and interviews to deepen and visualize dialogue and understanding of children in the review process. The process of reflection is important to properly evaluate one's own perspective and to be prepared to accept anything, not just this. Don't overlook what you see, not look at your child. It is necessary to be aware of "look good" rather than "see good". It is important to consider the way of reflection and dialogue while securing physical time. And looking back does not mean that something can be seen immediately, but that it can be seen by accepting anything.

保育の振り返りにおけるプロセスについての一考察 —子ども理解・対話・可視化に着目して—

田島 大輔

I はじめに

保育は、目の前にいる子どもの姿を基にしながら、その子どもに対してどのようにしてくべきかを考えていく行為であるともいえる。つまり、子どもをどのように理解するのかという事が非常に重要になってくる。幼稚園教育要領解説 (2018a) ¹⁾ に子ども理解について以下の様に述べられている。幼児の発達の姿は、大筋で見れば、どの幼児も共通した過程をたどると考えられる。幼児を指導する際に、教師はその年齢の多くの幼児が示す発達の姿について心得ておくことは、指導の仕方を大きく誤らないためには必要である。(中略) すなわち、幼児はその幼児らしい仕方で環境に興味や関心を持ち、環境に関わり、何らかの思いを実現し、発達するために必要ないろいろな体験をしているのであると記されている。ここでは、一人一人の幼児が関わり方や、受け止め方が異なってくる事について触れ、子ども一人一人がしている行動の意味を考えていくという、子ども理解の大切さについて述べている。

さらに発達していく過程を、保育者がどのように考えていくべきかについて、幼稚園教育要領解説 (2018b) ²⁾ では以下の様に示している。幼児一人一人の発達の特性 (その幼児らしい見方、考え方、感じ方、関わり方など) を理解し、その特性やその幼児が抱えている発達の課題に応じた指導をすることが大切であるとし、発達の特性の理解と、同時に幼児一人一人の特性、そしてその幼児の発達の特性を考えていく必要性について考えていく事を示唆している。しかし子どもは、遊びや生活の中で様々に形を変え表現している。それ故、一人一人の子どもの姿を読み取る難しさや専門性が必要になってくる。子どもの姿を読み取るためには、自分自身の保育を振り返る事が大切になるだろう。

1. 保育における「振り返り」とは

振り返りという行為は、どのような意味があろうのだろうか。津守 (1991) ³⁾ は、一日を振り返る事の意味について、保育の実践の素地であるとまで述べている。省察は保育の実践に欠くことのできない作業である。(略) 日々の省察において、子どもの理解が完全になされることはありえない。不十分なままに、おとなも子どもも次の新たな日を迎え、新しい一日を形成する。新たな省察がその上に重ねられる。こうして子どもの成長とおとなの成長とは、保育において同時進行すると省察 (振り返り) とは保育との連続性である行為であると重要性を語っている。D ショーン・柳沢訳 (2007) ⁴⁾ は、実践者自身の振り返りは、実践のさながらに振り返りが起きている事について行為の省察としてリフレクションという言葉を用いた。実践者は実践をとおして、実践に即して、実践中の行為を吟味をし、その場限り暫定的であっても、何らかの意味づけをしながら行為を行っているとして佐伯・刑部等、(2018) ⁵⁾ はショーンの「リフレクション」を基に意味づけた。それは、振り返りのあり方について、教育や保育における振り返りの特徴から、振り返る事の意味をわかるまで待つという「謙虚

さ」や、「予想や修正を受け入れる用意がある」というように再考した。いままでの実践では、対象を「三人称的」にみて、それを傍観者的に観察して「客観的」な法則や原理を導こうと「三人称的アプローチ」におちいついていたのではないかということ、ショーンの「リフレクション」論に対して重要な留意項目に加えたいと述べている。実践の中での省察と、実践を振り返ってする実践についての省察では、ものごととのとらえ方自体をさらなる原点から問いなおし、考えかたそのものが変わっていくことになる。つまり行為の中の省察を促すためには、佐伯が言うところの三人称的省察（物事を根本から見直してみる）省察が必要になる。実践者自身が省察し、さらに意味づけ、次の保育へとつなげていくように考えていく事はとても重要である。振り返った保育が、どのように次の実践へとつながり、子ども理解に結びつくのであろうか、振り返りの方法について考えていきたい。

2. 振り返りの方法としてのカンファレンス・対話

保育を振り返る方法としてよく行われているのが、保育カンファレンスである。カンファレンスは実践者が事例など、まとまりの記録を基に他者と共に検討を行う事をさしている。そもそもカンファレンスという概念は、臨床医学や臨床相談のカンファレンスの考え方・手法を、保育に取り入れたものである。医師や看護師、カウンセラー、ケースワーカーなどが臨床事例に基づき、それぞれの把握している状況、判断を出し合い対象者への対応を検討するとともに、その過程を通して専門性を高めていく営みを示す言葉であった。その後、教育分野において教育学研究者の稲垣（1986）⁶⁾によって「授業カンファレンス」として提唱された。平松（2011）⁷⁾によると、稲垣等は、医学や臨床心理学分野においてのカンファレンスの概念を基にして、アメリカの教育学者アイズナー(Eisner, N.)の「教育鑑賞と教育批評の融合」という考えをさらに付け加えて修正し、授業カンファレンスを通じた事例研究は、決して模範となる授業を求める研究ではないこと、そして正解を求めるのではなく、多様な見方・捉え方の交流において複雑で奥行きのある授業の理解を深めることであるとした。カンファレンスは、更に森上史郎によって保育界に応用された。保育の現場で行われる保育についての話し合いを、「保育カンファレンス」というものとして構想し、他者の見方に触れる中で、マンネリ化しやすい自分の保育実践をもう一度自覚させられ、自分の保育の向上をさせるなど、自分の保育を改めて省みる機会としてきた。

カンファレンスという方法ではなく対話という概念もある。これは2000年代に日本に実践が紹介されたイタリアのレージョ・エミリアにおける、実践の3つのDの内の1つである「ダイアログ」の影響もある（秋田、2001）。又近年では、認定こども園化等により複数担任で保育を行う事が多く行われている。「対話」は、振り返りに対してカンファレンスに比べてよりインフォーマルで気軽に話すということで情報共有するということやカンファレンスするほど時間がなく立ち話的に行う事も含まれていると考えられる。

II 研究の目的と方法

上記の様な議論を踏まえ本研究では、子ども理解を深めるための振り返りのプロセスにおいて、又振り返りがどのように可視化され、明日の保育へつながっていくかについて考えていきたい。振り返り（省察）については、保育者間で振り返りながら話す対話に着目し、対話の内容がどのように明日の保育へ活かされているかを考えていく。又対話をする中で、対話の内容や自分達の保育をどのように可視化していくことが明日の保育へとつながるのかについてどのような在り方や可能性があるのかも考えていく。

1. 対象

首都圏にある幼稚園・認定こども園・保育園 10 園（注 1）を対象とし、保育の振り返りをどのように行っているか、対話・可視化がどのように行われ振り返りから明日の保育や子ども理解へどのように活かされているのかについて実態を調査する。又保育者自身の主観的な語りから振り返りから次の実践との関係や要因を明らかにするためのデータ収集を目的とし、グループインタビューによる質的調査を行なった。

2. 調査内容

聞き取り調査では、振り返りの方法・対話の中身・可視化についての方法をどのように行い、意味があるのかと感じているかについて、又明日の保育や子ども理解について影響しているかについて自分自身がどのように感じているのか聞き取りを行った。聞き取り調査の調査項目は、振り返りの方法、対話の中身、対話や振り返りや可視化についての方法、明日の保育や子ども理解との関連性の 4 項目に大別される。

(1) 振り返りの方法・対話の中身について

振り返りについて、「どのような形態でおこなっているか」や「どのような方法で行なっているか」、「どれくらいの時間で行っているか」、「どのくらいの頻度でおこなっているか」それぞれについて聞き取りを行った。

(2) 保育の可視化について

可視化について、「保育の可視化をしているか」や「どのような形態・方法で行なっているか」、「どれくらいの時間を使っているか」、「どのくらいの頻度で可視化しているか」、「可視化の見る相手（届け先や見て欲しい相手）」、それぞれについて聞き取りを行った。

(3) 明日の保育や子ども理解について

振り返りがどのように機能しているかについて、「明日の保育にどのような意味を持ちましたか」や「振り返るときと、振り返らなかったときの違い」、「子ども理解について」、「困難だったこと」、それぞれについて聞き取りを行った。

どの質問項に対しても全体を通して、「上記以外で何かあれば」という時間を設け、振り返りの方法について自由にその他話せるようにした。

3. 調査方法・時期・手続き

調査は計3回行い、5月・7月・9月の時期に聞き取り調査を行った。研究の方法は振り返り場面の観察及びインフォーマルインタビューとしての聞き取り調査にて行う。調査園10園の実態と各々の園の保育者25人(注2)から聞き取り調査を行った。インタビューの際は筆者が行い、ICレコーダー(SONY ICD-UX570F)による録音を行なった。

本研究においては、保育実践という場は一人でやっている物ではなく、多様な人と協働しながら作り上げていくという視点や各々の視点の違い(秋田, 2001)を大事にした。この視点は、考察の重要な視点であると考え。そして実践当事者として実践を語ることは、当事者として語る事(やまだ2010)を大事にして聞き取り分析していく。

III 結果及び考察

1. 振り返りの方法について

どのような形態(a)・頻度と時間で行っているか(b)は、以下の図4の示す通りである。形態では、立ち話が多く公式な場として振り返りが設定されていないことがわかる「時間はとりたいがなかなかとることが難しく、忙しいままになってしまっている傾向がある」というような意見も多かった。時間を決めているとの中でも時間を捻出することの難しさが語られていた。

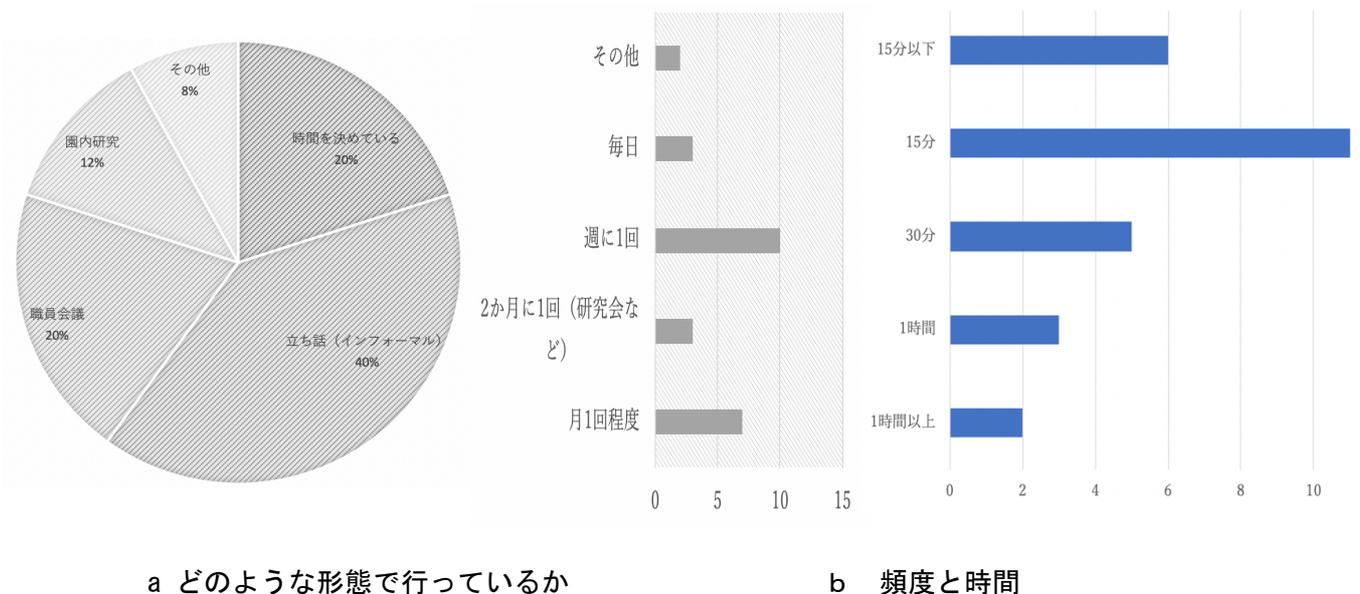


図4 振り返りの方法について (N=25)

(b) の頻度と時間に目を向けてみても、振り返りのスパンが長くいつのどのような事を振り返ったら良いかがわかりにくく、「時間をとっても何を振りかえったのが難しい」などの意見も多くみられた。園の中でも時間については、ばらつきが見られていたが、概ね 30 分以内での振り返りが求められている傾向が出ている。30 分以上の回答になる園では、その分頻度が下がるというような傾向と相関していた。「どのような方法で行なっているか」については、ワークシートなどの利用・写真など共有しやすいものを利用など、対話するということを意識しているような意見が多くみられた。振り返りをただ話すだけでなく対話を通して何かに残そうとしようとする姿勢がみられた。「上記以外で何かあれば」という部分においては、上記でも述べられている時間のことや回数・頻度のことが多くあげられ、振り替えの重要性の認識とできない事への困難さが語られていた。又「対話や振り返りをどのようにしたら良いかわからず、ただのおしゃべりとの違いに悩む」という意見や、「インフォーマルな場面では語れるが、いざ対話するや振り返るとなると意識してしまうのと、何か成果を出さなければならないとので難しい」の様な時間が用意されてもどのようにして良いかわからないという意見も複数みられた。

2. 保育の可視化について

可視化する形態・方法をどのように行なっているか、可視化をしているかについては、図 5 (a)・(b) の示すとおり、圧倒的に写真を使うというようなことが語られた。どれくらいの時間を使っているか、どのくらいの頻度で可視化してるかは (c) の示すように園便りの月 1 回程度の所から毎日行う所まで様々である事がわかった。

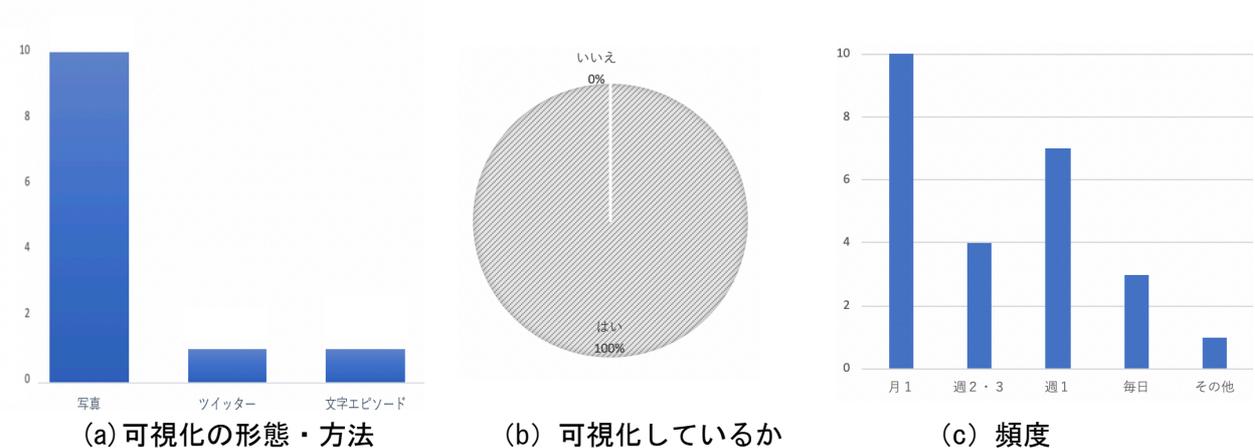


図 5 保育の可視化について (N=25)

可視化する相手 (届け先や見て欲しい相手) については、保護者というのが意見が一番多くみられ、「自分達のしていることについての理解を意味をなかなか話せないなので、紙面や写真などにして伝える」ということが語られていた。学級便り等の文字媒体から写真などのビジュアル化した物へと ICT 機器により変化している。しかし伝えるという意味で言うと、あまり変わっていないという意見がみられた。園長に見せるという意見も多かったが、確認の意味が大きい。又園の同僚にも見て欲しいと

いう意見も多く見られたが、先ほどの様に時間が無いということがあげられた。又可視化は行っているものの、「フィードバックやりアクションが無いと、継続するモチベーションにつながりにくい」ということや、「個人の力量差がでやすい。できる人は良いけど」等という意見や、「園として取り組むとなるとどこのラインに（力量）にあわせるのが難しく保護者を意識してしまう部分がある」などという意見があり、自分達のための可視化という側面よりも、保護者への説明としての要素が強いということが考えられる。

3. 明日の保育に向けて、子ども理解について

明日の保育にどのような意味を持ちましたか、振り返るときと、振り返らなかったときの違い、の問いに対しては、「振り返りから明日へつながっていくイメージはある。又振り返ること対話することの意味はわかってきている物の、それが何につながるかと聞かれると何ということが答えられない」や、「何かを求めすぎてしまうと急に難しくなる」、「自分達でやる事の限界性がある、園内研修などで外部の人が来てくれることにより意味づけられると良い」など意見があった。先ほどの意見にもあったように、何が見いだされたかが難しく、又それを意識すると急に振り返れなくなることや、対話が成立しにくいことが、観察の中でもあった。子ども理解についても先程と、同様にではあるが、誰かと言う対象がある分「その子の理解は深まった」、「焦点を当てると見えてくることがある」という意見も多かった。一方で、その子理解から先にいきづらい部分もあり、「自分の見方が見えてくることから逆に困難だったこともある」と、少数ではなく語っていた。困難だったことは方法や時間の捻出がやはりこの項目でも多くみられた。

IV 総合考察

今回の聞き取り調査では、聞き取り方法の問題点等もあり、昨今の多様化する保育事情もからか困難さが語られることが多かった。ただし、振り返る事の大切さ、対話することの重要性などや、振り返る事や対話することでの実感などが得られてきている保育者もいたのは事実である。又可視化する事も保護者に向けてということが大多数ではあったが、そこから保育の理解につながっていくこともあり、成果を上げている事例もあった。

振り返るプロセスの過程や対話においても、どのような判断でその場で考えたのが重要になってくる。佐伯・刑部等 (2018)⁸⁾は、リフレクションにおいてもっとも大切なのは、振り返る事でこうだと決めつけたり、この見え方でみなくてはならないという、〇〇せねばならないというリフレクションをしてしまうことであると述べている。さらにリフレクションを「謙虚」さとしてこのことを説明している。①自分を適正に評価する②自分の間違っていることを理解する③他者の意見を受け入れよとする。特に自分の意見と矛盾することを受け入れる体制を持つ。④自分の位置づけは大きなスキームの中では一部である事を理解する。⑤自己への焦点かは最低限で自己は忘れている状態（受け入れる）が保たれていることであるとしている(レディ・V 佐伯胖訳, 2015)。このようにせねばならないでもなく、自己反省して卑下する事でも無く何でも受け入れられる様なフラットな状態を保つ、答え

が出ることを急がず諦めず、待つことにより本当の良さ（相手の訴え）が聞こえてくると言うのである。田島・宮里等（2017）⁹⁾ は保育実践において、振り返りや対話の中では、すぐにつながる学びだけではない事（図 6 参照）を示している。

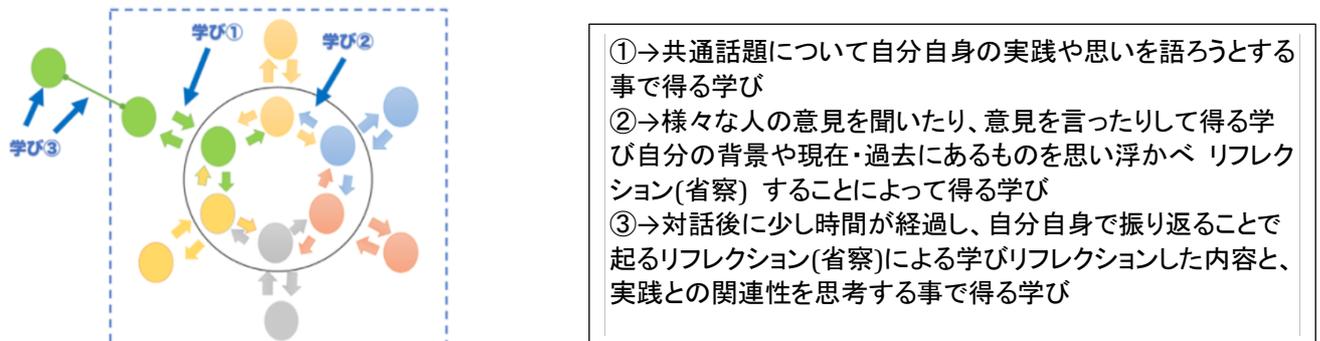


図 6 振り返りや対話から次の保育実践への構造図

学び③は、振り返りや対話の中では、よくわからなかったことでも、わかったつもりになることでなく、またわからなかったことを卑下するのではなく、気にとめておくことで（レディの言い方では忘れている状態や何でも受け入れられる状態）、どこかで「ああこのことか」ということがつながる。それこそが振り返ると言うことのプロセスの大切さになるのだ。自分の行為に対して適切な評価、自分がどうであったかをどのように判断したのかを考えていくことが大切になる。振り返る事や対話が、すぐに何かにつながらないということも考えられよう。

しかし振り返る事、対話することのプロセスについて、意味があると感じているにもかかわらず、方法や時間の捻出等の課題に対しても、考え向き合っていく必要があるだろう。いくら保育という行為自体が多様化している中であっても、大切だと思う気持ちや重要性の認識だけではなく、どのような方策を練るかという事も重要になってくる。どの項目でも、時間が足りないという意見が多かった。一方で、「まず5分でも良いからやってみると結構5分は長く感じた」や「短い時間でも継続していくと話し合えると言うことが見えてくるので、次に何を話そうと言うことが出てくる、それが継続すると自分自身なりに何となくではあるが繋がってくる」などの意見もあった。その園の事情は違うが、まず物理的に時間を捻出してみようということも重要になる。振り返りや対話はお堂してもこのような意見が出てくる。「〇〇先生は話すのが上手いからあのクラスはいい」や、「自分は口下手だから上手く語れない」などという個人に起因してくる問題である。対話や振り返りは話し上手な人が有利と言う問題である。そのためには語れる「ツール」を考える必要がある。

今回の園では、振り返りをしている園が多数であったため、ワークシートの様な振り返るツールを用意していたり、付箋を使用していたり、統一した枠組みを用意したり、写真を使って対話ができるようにしたりなどツールや方法が準備されていた。振り返りやすい、対話しやすいというツールを生み出していくということも大切になる。結果でも触れたが、特に写真が効果的である。ICT 機器の発達により、簡単にツール化しやすい代表例が写真であると指摘できる。「写真だと同じ場面か何かを見ているじゃないですか。だから自然と語れます」や、「写真はいろいろな情報があり、説明して

みると話すのが嫌だなではなくなる。いつの間にか対話になった」等良い面として語られた部分が多かった。一方で写真は情報量が多く、見えていない物まで見えてしまう事や、フィクションを生み出す問題もあるが、まず始めてみることで、振り返りの習慣化や省察思考を構築する営みが大切であろう。

振り返りのプロセスは、自分自身の見方を正しく評価し、こうであるべきではなく、どの様なことも受け入れられる心構えが重要である。子どものことを見ようとして見るのではなく、見えてくることを見逃さないこと。「よく見る」より「よく見える」事を意識していくことで必要があるであろう。その上で物理的な時間を確保しながら、振り返りや対話の方法を、自分達なりに考えていく事が重要である。そして振り返る事ですぐに何かが見えるようになるのではなく、何でも受け入れられるようにしておくことでみえてくるのである。

(注)

- (1) 対象園の概要は、幼稚園は私立 3 園公立 1 園、保育園は私立 1 園公立 3 園、認定こども園は、私立 1 園公立 2 園である。全て 100 人以上 300 人以下の認可園である。
- (2) 保育者 25 人は男性 3 人女性 22 人、勤務年数については 5 年未満が 8 人、5 年以上 10 年未満が 12 人、10 年以上 15 年未満が 6 人 15 年以上が 4 人である。協力者の同意を基に、研究の趣旨や方法について説明を行った。承諾を受けた部分についてのみ本研究において事例として挙げ、修正・訂正の希望する箇所がないか、確認する機会を設けるなどの配慮を行った。

引用文献

- 1) 幼稚園教育要領解説書 (2018a) 文部科学省 フレーベル館 pp37-pp123
- 2) 幼稚園教育要領解説書 (2018b) 同掲 pp38-pp39
- 3) 津守真 (1991) 子どもの世界をどうみるか NHK ブックス pp120-pp125
- 4) D, ショーン (2007)・柳沢昌一・三輪建二監訳 省察的实践とは何か 一プロフェッショナルの行為と思考 鼠書房 pp297-pp299
- 5) 佐伯胖・刑部育子・苺宿俊文 (2018) ビデオによるリフレクション入門 実践の多義 創発性拓く 東京大学出版会 pp8-pp34
- 6) 稲垣忠彦 (1986) 授業を変えるために一カンファレンスのすすめ 国土社 pp163-pp169
- 7) 平松美由紀 (2011) 幼児理解を深めるためのカンファレンスの検討 保育実践の一場面のカンファレンスの省察から 中国学園大学紀要(10) pp163-pp167
- 8) 佐伯胖・刑部育子・苺宿俊文 (2018b) 同掲 pp8-pp10
- 9) 田島大輔・宮里暁美・根津美英子等 (2017) 「発達の連続性に根ざした保育の在り方の検討 2」 第 70 回大会日本保育学会発表論文集

参考文献

- 秋田喜代美 (2001) 「子どもと育む授業作り」 岩波書店
 やまだようこ (2007) 「質的心理学の方法」 新曜社
 佐伯 胖・大豆生田啓友・渡辺 英則・三谷 大紀・高嶋 景子・汐見 稔幸著 (2013) 子どもを「人間としてみる」ということ:子どもとともにある保育の原点 ミネルヴァ書房
 V・レディ・佐伯胖訳 (2015) 驚くべき乳幼児の心の世界 2 人称的アプローチから見えてくること

ミネルヴァ書房